来青花

永井荷風

青空文庫

藤山吹の花早くも散りて、新樹のかげ忽ち小暗く、盛久しき躑躅の花の色も稍うつろひ行く時、松のみどりの長くのびて、金色の花粉風来れば烟の如く飛びまがふ。月正に五月に入つて旬日を経たる頃なり。もし花卉を愛する人のたま〳〵わが廃宅に訪来ることあらんか、蝶影片々たる閑庭異様なる花香の脉々として漂へるを知るべし。而して其香気は梅花梨花の高淡なるにあらず、丁香薔薇の清涼なるにもあらず、将又百合の香の重く悩ましきにも似ざれば、人或はこれを以て隣家の厨に林檎を焼き蜂蜜を煮詰むる匂の漏来るものとなすべし。此れ便先考来青山人往年滬上より携へ帰られし江南の一奇花、わが初夏の清風に乗じて盛に甘味を帯びたる香気を放てるなり。初め鉢植にてありしを地に下してより俄に繁茂し、二十年の今日既に来青閣の檐辺に達して秋暑の夕よく斜陽の窓を射るを遮るに至れり。常磐木にてその葉は黐木に似たり。園丁これをオガタマの木と呼べどもわれ未オガタマなるものを知らねば、一日座右にありし萩の家先生が辞典を見しに古今集三木の一古語にして実物不詳とあり。然れば園丁の云ふところ亦遽に信ずるに足らず。余屡先考の詩稿を反復すれども詠吟いまだ一首としてこの花に及べるものを見ず。母に問ふと雖また其の名を知るによしなし。此に於てわれ自ら名づくるに来青花の三字を以てしたり。五月薫風簾を動し、門外しきりに苗売の声も長閑によび行くあり。満庭の樹影青苔の上によこたはりて清夏の逸興遽に来るを覚ゆる時、われ年々来青花のほとりに先考所蔵の唐本を曝して誦読日の傾くを忘る。来青花その大さ桃花の如く六瓣にして、其の

色は黄ならず白ならず恰も琢磨したる象牙の如し。而して花瓣の肉甚厚く、仄に臙脂の隈取をなせるは正に佳人の爪紅を施したるに譬ふべし。花心大にして七菊花の形をなし、臙脂の色濃く紫にまがふ。一花落つれば、一花開き、五月を過ぎて六月霖雨の候に入り花始めて尽く。われ此の花に相対して馥郁たる其の香風の中に坐するや、秦淮秣陵の詩歌おのづから胸中に浮来るを覚ゆ。今試に菩提樹の花を見てよく北欧の牧野田家の光景を想像し、橄欖樹の花に南欧海岸の風光を思ひ、リラの花香に巴里庭園の美を眼前に彷彿たらしむることを得べしとせんか。月の夜萩と芒の影おのづから墨絵の模様を地に描けるを見ば、誰かわが詩歌俗曲の洒脱なる風致に思到らざらんや。われ茉莉素馨の花と而してこの来青花に対すれば必先考日夜愛読せし所の中華の詩歌楽府艶史の類を想起せずんばあらざるなり。先考の深く中華の文物を憬慕せらるゝや、南船北馬その遊跡十八省に遍くして猶足れりとせず、遥に異郷の花木を携帰りてこれを故園に移し植ゑ、悠々として余生を楽しみたまひき。物一度愛すれば正に進んで此の如くならざる可からず。三昧の境に入るといふもの即ちこれなり。われ省みてわが疎懶の性遂にこゝに至ること能はざるを愧づ。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆1　花」作品社
1983（昭和58）年2月25日第1刷発行
2001（平成13）年3月20日第29刷発行
底本の親本：「荷風全集　第一四巻」岩波書店
1963（昭和38）年6月発行
入力：門田裕志
校正：noriko saito
2009年11月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

来青花

永井荷風

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/